

2サムエル記 15章 25-26節 「主に道を委ねる」

1A 愛する者の反抗

1B 息子

2B 友

2A 御心への委託

1B 恐れと不安

2B 怒りとねたみ

3A まっすぐにされる道

1B 自分の無力

2B 主の約束と計画

3B 全き愛

本文

私たちの聖書通読の学びは、前回、サムエル記第二 12章まで来ました。午後に、13章から15章までを学びたいと思いますが、今朝は15章 25-26節を開いてください。

25 王はツアドクに言った。「神の箱を町に戻しなさい。もし、私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださろう。26 もし主が、『あなたはわたしの心になかない。』と言われるなら、どうか、この私に主が良いと思われることをして下さるように。」

みなさん、私たちのアメリカへの旅行のために祈ってくださってありがとうございます。アメリカでは、宣教会議に参加すること、教会の牧師や友人、また祈ってくれている兄弟姉妹に宣教してきました。またアメリカに住んでいる日本人に聖書を教えることもしました。宣教会議での主題は、「暗闇の中の光」でありました。会議には、世界中で宣教活動をしている人々が集まっているのですが、どこの国でもこれまでにない大きな悩みの中にいます。状況は良くなるのではなく、むしろ悪いことしか起こらないであろうという予測しかできません。その中にあっても、なおのことキリスト者が携えている福音は光を放つことができる、という内容です。

こうした世の中で、人々が心に抱いているのは主に二つあると思いました。一つは恐れと不安です。これからどうなっていくのか、ということを実直に考えれば気が狂いそうになるほどです。自殺や精神疾患は日本だけの現象ではなく、今は世界中に蔓延しています。もう一つは怒りです。どうしようもない状況の中で、どこかに怒りのはけ口を求めています。けれども、キリスト者はイエスご自身に目を留めることによって、また神の愛の中に自分を保ち、主が命じられたことに専念することによって、これらの徴候の中にあっても、これまでと変わらない、いやこれまで以上の力

強いキリストの証しを立てることができます。

私たちがサムエル記第二 13 章から学ぶのは、悩み多きダビデの後半の人生になります。彼はクーデターによって、エルサレムを離れなければいけなくなったのです。これまで築いてきたイスラエルの国が無くなってしまおう危機に陥りました。泥沼のような状況にあっても、なおのこと神が勝利をしてくださる足跡を見ることができます。

1A 愛する者の反抗

1B 息子

ダビデの息子の一人、アムノンが同じくダビデの娘の一人、タマルを凌辱しました。そのことで、タマルと同じ母を持つアブシャロムがアムノンを憎みました。彼は、アムノンを殺し逃亡しました。ダビデはいつまでもアブシャロムと会うことをしませんでした、ようやくのこと彼と顔を合わせました。

けれどもアブシャロムには反抗心とうぬぼれが生まれていました。彼は王のところに助けを乞いに来た人たちを、宮殿の手前で捕まえて、王の所にはその願いを聞いてくれる人はいない、私がさばきつかさであれば、きちんと助けることができるのに、と言いました。それを長いこと行っていたので、ダビデへの心を自分のほうになびかせることに成功したのです。彼はヘブロンに人々を集めて、そこで自分が王であることを宣言しました。かつてダビデがユダ族の人々から王として任命を受けたところと同じ場所で受けました。そしてエルサレムに向かおうとしたのです。

ダビデにとって、これは気も狂いそうな辛いことでした。敵性勢力がクーデターをもくろむのならばまだ我慢できます。そうではなく、自分の愛する息子が自分に反抗したのです。

2B 友

それだけでありません。ダビデの議官であったアヒトフェルがアブシャロムにくみしたのです。彼は非常に優れた議官であっただけでなく、ダビデの親友でもありました。彼は詩篇 55 篇でアヒトフェルが裏切った時のことの心境を語っています。「まことに、私をそしめる者が敵ではありません。それなら私は忍べたでしょう。私に向かって高ぶる者が私を憎む者ではありません。それなら私は、彼から身を隠したでしょう。そうではなくて、おまえが。私の同輩、私の友、私の親友のおまえが。私たちは、いっしょに仲良く語り合い、神の家に群れといっしょに歩いて行ったのに。(55:12-14)」

ダビデは、エルサレムに留まって、王座を固持するためにアブシャロムの軍と戦うことを願いませんでした。エルサレムを血の海にしたくなかったのです。それで自分のほうからエルサレムを出て行くことを選び取りました。これで、彼は自ら王座から退いたのです。ダビデはこれまでのすべてのものを失ったばかりでなく、自分の命さえ脅かされる逃亡生活に入ったのです。

2A 御心への委託

ダビデには数少ない家臣とその他の一団が彼について行きました。そして祭司たちも神の箱を運んで行きました。けれどもダビデが途中で、彼らに戻るように言いつけるのです。それが先ほど読んだ聖書箇所です。「25 神の箱を町に戻しなさい。もし、私が主の恵みをいただくことができれば、主は、私を連れ戻し、神の箱とその住まいとを見せてくださろう。26 もし主が、『あなたはわたしの心になわなない。』と言われるなら、どうか、この私に主が良いと思われることをして下さるよう。」ダビデは、自分自身を主の御心に完全に委ねたのです。彼はもちろん、自がエルサレムに戻ることを願っています。けれども、それは専ら主が恵みを与えてくださるからできることだ、と言っています。そして、たとえそうならなくとも、それは主が自分を御心になわなないとしているのだから、主が良いと思われることをして下さるよう、と祈っているのです。

私たちは、神に対してどのような祈りをしているのでしょうか？ 願いを立てる時に、それが願いであるか、それとも要求であるかを見極めることが大切です。私たちが人に接する時に、その人が正しい方向に進んでほしいと願っている時に、それを願いながらも、なお、その人の心を神が変えてくださると願って、主に委ねていくことができます。その一方で、自分が正しいと思っていることを相手が変わるように要求することもできます。その時、主導者は神ではなく自分になっています。主が導かれるのではなく、自分が導いてしまっているのです。

私たちは神にさえも、同じ態度で臨むことがあります。神に祈る時に、自分の願いを前面に持っていき、自分が願っているように神に従ってもらうように仕向けようとします。自分のうちにある不安や恐れを解消するために、自分の意志を神に押し通そうとするのです。けれども、それは間違った態度です。主に願いを立てるのですが、主が、ご自分が良いと思われることを行なうのだ、と信じ、受け入れるのです。

私たちは、主の御手の流れを感じ取る必要があります。主が約束してくださったことは、確かにその通りになります。けれども、その過程でその約束とは異なるようなことが起こります。そこで悩み、なぜなのか？と疑問を抱くのですが、自分にはまだ悟っていない神の御心があるのだということに気づかなければいけません。詩篇 77 篇には、主の恵みの御業が行われずに泣き崩れている者の声があります。けれども、彼は次のように悟りました。「私の弱いのはいと高き方の右の手が変わったことによる。(10 節)」主は決して約束を反故にされたのではありません。けれども、今、その約束を果たされるための神の御心が自分の思っていた方法とは異なり、変わっていたことに彼は気づいたのです。それで彼は、主に自分の道をゆだねることができ、平安を取り戻すことができました。

ダビデには、このエルサレムで自分が王として統治し、その家はとこしえにまで続くという約束が与えられていました。ですから、アブシャロムがエルサレムを牛耳った時に、彼はいくらでも神に疑問を投げかけ、怒り、苦しみ、不安になることはできました。けれども、祭司に対するダビデの言葉

には、そうした声は聞こえてきません。主に委ねきった、平静を保った心から出てきた言葉です。心に痛みはあったでしょう、けれども不安や恐れ、また怒りが彼を支配することはありませんでした。

1B 恐れと不安

イザヤ書にこうあります。「志の堅固な者を、あなたは全き平安のうちに守られます。その人があなたに信頼しているからです。(26:3)」志が堅固であるというのは、自分のすべてを主に委ねることを心に強く定めている姿です。その時に、主が自分の心を全き平安のうちに守ってくださいます。状況は変わらないかもしれませんが、その状況に対する自分の姿勢が変わるのです。

イエス様も、このことをゲッセマネの園で行われました。血のしたたるような、もたえ苦しむ祈りでしたが、「しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。(ルカ 22:42)」と祈りました。その後の主の態度は、十字架における苦しみは当然のこと存在しましたが、心は、その苦しみの杯から遠ざかりたいという迷いはなかったのです。

ペテロは、迫害を受けている兄弟たちに、こう言って励ましました。「あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。(1ペテロ 2:21-23)」

2B 怒りとねたみ

そして、主の御心に委ねる祈りは、私たちは恐れや不安からだけでなく、怒りやねたみからも救い出してくれます。ダビデがアブシャロムの悪、またアヒトフェルの悪に直面しています。けれども、彼はそれに怒り狂うことはありませんでした。詩篇 37 篇で、ダビデは怒るなという強い戒めを与えています。「1 悪を行なう者に対して腹を立てるな。不正を行なう者に対してねたみを起こすな。2 彼らは草のようにたちまちしおれ、青草のように枯れるのだ。3 主に信頼して善を行なえ。地に住み、誠実を養え。4 主をおのれの喜びとせよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。5 あなたの道を主にゆだねよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる。6 主は、あなたの義を光のように、あなたのさばきを真昼のように輝かされる。」自分の道を主にゆだねます。主に信頼します。そうすれば、主が成し遂げてくださいます。そして自分は怒りやねたみで苦しむのではなく、善を行なうことに専念できるのです。

宣教会議である兄弟に会いました。今、私がかつて通ったスクール・オブ・ミニストリーの二年生です。彼はかなり成功したビジネスマンでした。ビル・ゲイツと共にマイクロソフト事業にたずさっていたそうです。けれども、まだクリスチャンではない奥さんが家出をして、他の男のところに行ってしまう。そして彼を告訴したのです。彼が多くの時間をクリスチャンの活動に捧げたので、精

神的苦痛を味わったという根拠で慰謝料を請求していました。彼は、尊敬する牧師に相談しました。その牧師はこう助言したそうです。「すべて要求するものを与えてしまいなさい。」それで、彼は自分の家を始め、要求してきた全ての財産を明け渡したのです。彼は今、宣教の情熱に満たされています。アフリカにある大きな宣教団体の責任を任されることになるそうです。

ある意味で、主にすべてを任せることは、苦境からの救出を信じるよりもさらに大きな信仰を要するのかもしれませんが。けれども、任せれば、そこには平安があります。心には安息が与えられます。「すべて疲れている者、重荷をもっている者はわたしのところに来なさい。休ませてあげよう。」と主が言われた通りです。そして満足が与えられます。「しかし、満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です。(1テモテ 6:6)」

3A まっすぐにされる道

そして主に自分の道をゆだねた者には、主がその道をまっすぐにしてください。「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。(箴言 3:6)」私たちは次回の学びで、主がアブシャロムの反乱を鎮めてくださるところを読みます。ダビデではなく、主が道をまっすぐにしてくださいました。

1B 自分の無力

では、私たちはどのようにすれば、主にゆだねることができるのでしょうか？一つは、自分には何もできない、主がそう願っておられなければ何一つすることができないことを認めることです。「主が家を建てるのでなければ、建てる者の働きはむなし。主が町を守るのでなければ、守る者の見張りはむなし。(詩篇 127:1)」主が家を建てなければ、私たちが建てようと思ってもそれは空しい働きになってしまいます。また、主が町を守っておられるのではなければ、私たちがいくら見張りをしても無駄なことです。主のみが成し遂げることができることを認めます。

2B 主の約束と計画

そして、主のご計画と約束にゆだねます。今の自分には理解できないけれども、主のご計画は希望と将来を与えるものです。「わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。…主の御告げ。…それはわざわざではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。(エレミヤ 29:11)」そしてローマ 8 章 28 節があります。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」

3B 全き愛

そして、神の全き愛を知ってください。私たちは「愛」というものを矮小化してしまう傾向があります。自分の思い描いている愛があって、その枠組みから外れたものは愛ではないと思ってしまいます。けれどもパウロが言いました。「すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほ

どであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができ
ますように。(エペソ 3:18-19)」実は、火の矢のように襲いかかる大きな試練の中にも神の愛が十
分に表れているのです。「私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦し
みですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。『あなたのために、私た
ちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりで
す。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、
圧倒的な勝利者となるのです。(ローマ 8:35-37)」

この、自分がどんなところにいるか、決して引き離されない愛を受け入れた時に、私たちの心に
恐れが締め出されます。「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。(1ヨハネ
4:18)」